

龍谷大学世界仏教文化研究センター 公開研究会

タイトル	「人類知のポリリズムー華嚴思想の可能性ー」
開催日時	2018年2月11日(日) 13:00~18:00
場所	龍谷大学 大宮学舎 清和館 3F ホール
研究発表者 (発表順)	唐澤太輔(龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員) 野呂靖(龍谷大学文学部准教授) 亀山隆彦(龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント)
講演者 (発表順)	河合俊雄(京都大学こころの未来研究センター教授) 中沢新一(明治大学野生の科学研究所所長)
開会挨拶	能仁正顕(龍谷大学世界仏教文化研究センター長)
司会	金澤豊(世界仏教文化研究センター博士研究員)
コーディネーター・ 謝辞	唐澤太輔(世界仏教文化研究センター博士研究員)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
共催	明治大学野生の科学研究所、京都大学こころの未来研究センター、龍谷学会
協力	龍谷大学仏教文化研究所「仏教と聖地に関する総合的研究ー聖なる表象とは何かー」(研究代表:楠淳澄)、龍谷大学アジア仏教文化研究センター
参加人数	200人

【研究会の主旨】

華嚴思想には、人類の営為における重要な知が隠されている。その重々無尽に重なり合うポリリズム(複音)のような知は、現代社会

における大きな指針となり得るものである。自然破壊や人間同士の関係の断裂が目立つ今、動的かつ柔軟な、すなわち華嚴的な「つながり」を見直すことは急務であると思われる。

この度、思想家・人類学者の中沢新一氏(明治大学野生の科学研究所所長)と臨床心理学者の河合俊雄氏(京都大学こころの未来研究センター教授)を招聘し、龍谷大学の若手三人(唐澤太輔氏、野呂靖氏、亀山隆彦氏)の研究者を交えた公開研究会を開催した。

【研究会の概要】

■ 第一部 研究発表

第一部(13:10～14:50)では、唐澤太輔氏、野呂靖氏、亀山隆彦氏の三名の研究発表が行われた。

① 「南方熊楠の生命観と華嚴思想」

唐澤太輔(龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員、本会コーディネーター)

唐澤氏は、まず、知の巨人と言われた南方熊楠の言説に華嚴思想が大きな影響を与えていること彼の残した言葉から明らかにした。また南方が『華嚴五教章』(法蔵著)を読んでいたことを指摘した。

南方が彼の研究対象である粘菌(変形菌)という個の中に見ていたものは大宇宙であった。彼の時間感覚は、まさに華嚴的であり、過去→現在→未来という時間の矢ではなく今この瞬間に全てを感じ取っていた。このような事柄を、唐澤氏は南方の言葉の中に見出し解説した。

いわゆる「南方マンダラ」と呼ばれる図は、まさに重々無尽に錯綜する因陀羅網のようである。この図に非常によく似た図(動的分類学を示す図)を早田文蔵という植物学者も描いている。唐澤氏によって、早田はその図を示し「これは『華嚴経』の因陀羅網の比喩から影響を受けた」と述べていることが紹介された。



② 「明恵の〈夢〉と華嚴思想」

野呂靖(龍谷大学文学部准教授)



野呂氏は、明恵房高弁の宗教活動(教義・実践)において〈夢〉(明恵の夢の記録は、約470点現存しているという)はどのような意味を持っていたのかについて発表を行った。

野呂氏は、明恵の言葉から、彼が、過去の人である釈尊や「入法界品」の善財童子が歴訪した53人の善知識、さらには華嚴宗の祖

師である杜順、智儼、法蔵の「現在性」を感じ取っていたことが分かることを指摘した。また明恵の〈夢〉からは、彼の教義理解や実践行とのかかわりがよく分かるともいう。その事例として、野呂氏は、明恵の〈夢〉の中に見られる「滅罪の確認」「修行の成否の確認」「教義理解の確認」「著作の正統性の確認」を紹介した。

さらに「十二支縁起を飛び越える」「菩薩の位階を歩む」「擬人化された「華嚴」」の〈夢〉などからは、明恵にとって経典や教義は、単に概念的な理論ではなく、文字通り「生きる」ものあるいは「生きている」ものであったことが述べられた。

③ 「マンドラと法界：東アジア密教における華嚴思想の意義」 亀山隆彦(龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント)

亀山氏は『秘密曼荼羅十住心論』『即身成仏義』といった文献の検討を通じて、弘法大師空海の真言密教における華嚴思想の意義について考察した。

まず中世期の真言宗における五行思想の位置付けを検討し、僧達にとって華嚴を含む中国の宗教思想はブリコラージュ的に便利に利用できる道具として、その「道具箱」に常備されていた可能性を議論した。

次に『秘密曼荼羅十住心論』を検討し、空海は法蔵等の主張に基づいて『華嚴経』の思想内容を把握しており、「五教判」「十玄縁起」「六相円融」を「至要」とすること、「因陀羅網」の概念にも注目していたことを明らかにした。

その議論を踏まえて『即身成仏義』を検討し、インド由来の「瑜伽」や「曼荼羅」を解釈する際、空海が華嚴の「因陀羅珠網」を譬喩として用いることの意義を考察した。「因陀羅珠網」と結び付くことで、空海の「瑜伽」「曼荼羅」観は、インドにはない独自の理解となっていたといえる。

最後に空海が華嚴思想を重用する理由を、同時代の日本ないし中国仏教界の状況を踏まえて考察した。



■ 第二部 講演

第二部(15:00～16:50)では、河合俊雄氏、中沢新一氏が講演を行った。

④ 「ユング派心理療法と華嚴経」 河合俊雄(京都大学こころの未来研究センター教授)

河合氏によって、ユング心理学がどのように日本で変容を遂げていったか、また『華嚴経』の思想がどうして日本人の心にフィットしたのかに関する講演が行われた。ユング心理学と華嚴思想の類似点についても解説された。

河合氏は、華嚴思想において、真理と迷妄、悟りと迷いが単純に分けられずダイナミックに関係していることが興味深く、またこのよう



な両面的な在り方は、ユング派の心理療法にも大きく関わっていると述べた。例えば、統合失調症のクライアントが太陽について述べたり描いたりするいわゆる「太陽体験」や、中心を持つ幾何学模様(マンダラ)の描写などは、しばしば回復期と崩壊期に見られるものであり、河合氏は、この両面的な在り方は華嚴思想にも通ず

るものであると指摘した。

日本において箱庭療法は広く受け入れられているが、その背景を、河合氏は、日本人は、古来「自然につつまれる」という感覚が強かったためだと分析する。そして、日本の箱庭療法に見られる特徴は、現実と超越的次元の差異が明らかではない、また象徴性が少ないことだという。

河合氏によると、日本は主体を立てる、つまり主体から出発する心理学ではないという。そもそもクライアントが抱えている問題は、肯定でも否定でもない事柄ばかりなのである。河合氏は、そのような場合「何もしない」ことで、そこから何か(イメージ)が立ち上がると述べる。「無」から何か立ち上がる——これは華嚴で言うところの理事無礙的な在り方であり、それをどのように捉えるかがユング派心理療法の実践でも行われているという。また河合氏は、この「無」にも、創造的な無と病的な無という両面性があると述べる。例えば病的な無は、例えば自閉症スペクトラムにおいて、自他の分離ができない、主体がないことで、どこに焦点を当てればよいか分からないという事柄として現れることもあるという。

河合氏は、以下のようなプレイ・セラピーの事例を挙げて「無」から主体の立ち上がり方を説明する。

クライアントがボーリングのピンを倒して並べる遊びを行っていた。これは分離もなく高さもない状態を表している。次の瞬間、クライアントは、そのピンを立てた。これは、まさに分離と主体の発生を意味しているものである。

ユングは、二者関係を超えた世界の広がり、共時性に着目していたが、河合氏は、臨床でも実際にこのような偶然の一致がよく見られると言う。また河合氏は、この共時性は、「縁」の特殊な例であろうという。

河合氏は最後に、今後、華嚴思想からユングの言葉や考えを見直す試みも行っていきたいという展望を述べた。

⑤ 「レンマ学としての華嚴」 中沢新一(明治大学野生の科学研究所所長)

中沢氏は、現在、新しい知的な体系・学問体系を創出する試みを行っている。それが「レンマ学」である。またそれは、鈴木大拙や山内得立、井筒俊彦らによって未完成に終わった試みでもある。

ロゴスとは、ギリシャ人が最も重視した考え方で、もともと「目の前にあるものを並べる」という意味を持っている。しかし、ギリシャ人は、このロゴスとは異なるレンマの知性作用も知っていた。このレンマとは「一気につかみ取る」ことを原義とし、中沢氏は、これこそが「世界」の根底にあり、またリアリティをつかむため最適の方法だという。そしてその思考方法は、特にインドにおいて洗練され、アジアの思想の見事な自己表現となったという。



中沢氏によると、『華嚴経』には、現実において人間が行っている世間知が作り出す煩悩をどう解消していくかではなく、「一心」、すなわち純粹状態の心の働き、さらに言うのであれば、純粹レンマの知性による運動、内部構造、論理だけが取り上げられたものが『華嚴経』なのである。『華嚴経』は、ありとあらゆる比喩、論理、幾何学構造をもって、レンマを表現しようとしたものといえる。

私たちが今生きている世界は、ロゴスの考え方が主になっている。人工知能は、まさにロゴスの知性を純化したものであろう。中沢氏は、人工知能は、私たちの脳の働き(ニューロンの活動)と深いつながりがあると指摘する。脳内で電気信号が次々と伝わっていく計算処理のモデルは人工知能と基本的に同じであるという。

仏教では、このロゴスの機能は、人間の一部にすぎないとする。人間にはロゴスと同時にレンマの知性作用が内在しているのだ。中沢氏は、このレンマ的過程は目に見えないが、実際に働いて人間の心の実相を作っているという。

西洋に目を移すと、フロイトが、ロゴスの知性の下(無意識)に「エス」という何か具体的には分からず、また合理的に処理できないようなものを見出したことを、中沢氏は評価する。この「エス」は、まさに縁起的に動いており、またロゴスとは異なり、分離しているものを結び付ける働きを行っているという。しかし、西洋において「無意識」は、非常に暗いものとして扱われている。一方、仏教における心は、明るい光の波動体として捉えられている。その心が全面的に作動したとき、どのような世界が現れるか。それを『華嚴経』はよく示しているという。

「複雑だが構造と運動法則がある」「個性をもったまま相互陥入している」、中沢氏は、そのような事柄をベースとした学の可能性を探っている。中沢氏は最後に、東洋と西洋の対立がもはや崩壊した現在、つまりこのグローバル化した時代において、全世界を覆いつつあるロゴスの知性とは異なる「新しいサイエンス」を作らなければならないと述べ、講演を締めくくった。

■ 第三部 ディスカッション

第三部(17:00~17:50)では、中沢新一氏、河合俊雄氏、唐澤太輔氏、野呂靖氏、亀山隆彦氏〔司会進行〕によってディスカッション

が行われた。最初に各登壇者から補足コメントをいただき、その後、事前に会場から回収していた質問票をもとに議論が展開された。

補足コメント



まず唐澤氏によって、南方に『華嚴五教章』を送った人物は高藤秀本であったこと、また彼は土宜法龍の下で働いていた真言僧侶であり、南方を種智院大学の教授として招聘しようとしていたことが述べられた。そして「南方マンダラ」と非常によく似た図を描いた植物学者・早田文蔵は、南方同時代に生きてはいたが、両者には全く面識が

なかったことが付け加えられた。

次に野呂氏から、日本においては『華嚴五教章』が『華嚴経』の最も重要な注釈書であったことが述べられた。しかし、実は華嚴思想のエッセンスの中でも重要な「法界縁起」「相即相入」等の箇所はあまり読まれていなかったことが補足された。

亀山氏は、中国では華嚴と密教と禅の三者交渉があり、お互いの経典などを参照しあっていたことを補足した。そして、空海もそのような言説の中で位置づけることができるのではないかと述べた。

河合氏は、マルタ島でのユング派心理療法の訓練での事例を挙げ、そこでは〈夢〉で出てくる人物などが全て聖人に当てはめられることが述べられた。そして「象徴性」は、どの程度日本の仏教に見られるかという疑問を呈した。また今後『華嚴経』からどのような「サイエンス」が抽出されていくか興味深いと述べられた。さらに河合氏は、日本の箱庭の特徴として「美的である」という点を挙げた。そして、一つのものが全てを含むという在り方は、往々にして美しく現れるものであることが述べられた。

中沢氏は『華嚴五教章』のみならず『大乘起信論』も日本人に大きな影響を与えていたと述べた。真如と現象は同時にあり、この思考方法は『華嚴経』では「縁起」で説明しているという。また日本では、真如と現象とを媒介するものは用いない思考方法、つまり真如はそのまま現象であり現象はそのまま真如である思考方法が芸術、例えば俳句などに見られると述べた。

夢と現実、生と死、真如と現象が個々でありながらも相互陥入している世界観が、我々の生きている現代においてどう生かされるのか。

河合氏は、歴史的に見ても日本人は「心の古層」においては、真如と現象などの両極を結び付けて残続けてきたのではないかと述べた。例えば、中世の書物などでも、本当に〈夢〉か現実か分からないものが非常に多いという。『遠野物語拾遺』でも正夢のような内容ばかりが扱われているという。

中沢氏によると、量子論はまさにレンマを用いているという。『華嚴五教章』に見られる数の事例とハイゼンベルグの考えていたことは同じであり、要するにそこに見られるのは、相互作用によっ

て成り立つ世界であるという。そして中沢氏は、現在の学問は、この事柄に蓋ををしてしまっているのではないかと述べた。

唐澤氏は、南方は華嚴思想のエッセンスをしっかりとつかみ取り、自然科学的方法をどうにか突破しようとしていたのではないかと述べた。また真如と現実を同時にあらしめる夢を、南方が非常に重視していたことを付け加えた。

野呂氏は、明恵と彼の弟子の言葉から、明恵は意図的に〈夢〉を見、華嚴的世界を体験していたのではないかという。明恵は、言わば訓練して、経典の中に入り込んでその体験していたのではないかと述べた。

夢を見る心について。あるいは仏教と夢について。

河合氏は、明恵には、象徴性と同時に、身体性、直接性が多く見られると言う。また明恵は、野呂氏が言うように完全に経典の中に入り込んでおり（それは訓練というよりもっと強烈なもの）、彼にとっては一リアルな事柄であったという。また南方の場合、常に〈夢〉と現実が入り混ざっていることを指摘した。

亀山氏は、〈夢〉から見た現実とは何かを考えていくことが今後重要ではないかと述べた。

中沢氏は、〈夢〉と現実という区別の仕方に疑問を呈する。現実も夢の一つであり、またそれをどう解釈していくかは文化ごとにかなり変わってくることを付け加えた。また、仏教が示していながら、我々のたどり着いていない空間性、時間性があることを述べた。

【まとめ】

中沢氏によっても指摘されたが、華嚴思想は量子力学などとも非常に親近性がある。また河合氏のように、ユング心理学の立場からのアプローチも可能である。つまり、華嚴思想は今や仏教学の枠組みを超えて我々に新しい学、まさにレンマ学の在り方を示唆していると言えるだろう。

唐澤氏が発表した南方熊楠や野呂氏が発表した明恵が強烈な関心を示した〈夢〉という場は、場所や文化あるいは人によって象徴的に解釈されることもあれば直接的に解釈されることもある。しかし、その真如と現実とが同時にあり得るような場、あるいは両極に浸透する場としての〈夢〉の在り方を知る、また逆に亀山氏が指摘するように〈夢〉の場から現実を見ることは「現実」「個」に固執しすぎている我々現代人にとって、非常に重要かつ示唆に富むものであると思われる。

中沢氏から河合氏への呼びかけによって始まり、今回、龍谷大学の若手研究者を交えて開催されたこの新しい華嚴研究会を、今後も大学、センター、研究所の枠を超えて継続していくことが大いに期待される。

以上

【文責：龍谷大学世界仏教文化研究センター：唐澤太輔、亀山隆彦】

